

地学系自然史博物館の理想と現実

糸魚川 淳 二¹⁾

1. はじめに

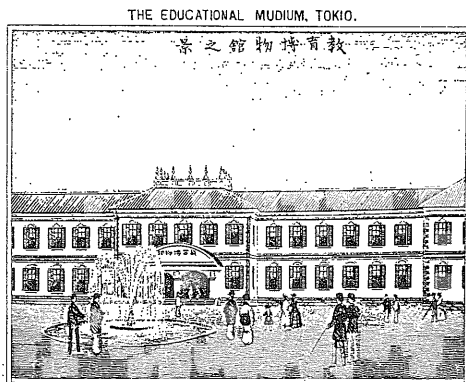
江戸時代の終りに、アメリカやヨーロッパへ使節として出かけた日本人はあちこちで博物館を見た。そのことは、いろいろな形で記載されているが、呼び方は「百物館」、「博物所」、「展覧所」、「百貨貯蔵所」、「博物館」など、さまざまである。やがて、博物館という呼び方が、福沢諭吉の「西洋事情」(明治3年, 1870)によって一般的になっていった。

そして、「文部省博物館」の名で計画された博覧会が、明治5年(1872)3月から開催された。盛況であったので、会期が延長され、終わった後も定期的に公開されるようになった。博覧会から博物館へ移行したのである。

その後、この博物館はいろいろな経緯を経て、明治8年(1875)に、内務省の博物館と文部省の博物館の2つに分かれる。前者は現在の東京国立博物館、後者は国立科学博物館である。文部省の博物館は東京博物館、教育博物館(第1図)など、名前を変えながら、自然史資料を中心に扱い、現在まで続いていることになる。

こうした初期の時代から100年以上たつて、現在の日本では、博物館は花盛りである。戦後しばらくして始まった各種の博物館建設は現在も続き、1年に100館近くが誕生している。その結果として、1988年の終りで約4,700館、21世紀には7,400~11,300館になるだろうという予測さえ生れている。これだけの数になると、実に多様な博物館が存在する。国立・県立の大きなものから個人の小さなものまで、内容も美術・歴史・考古・自然史・理工・産業など、動・植物園や水族館まで含まれる。運営のしかたもさまざまである。性格もいろいろで、研究を主とするもの、観光めあてのもの、個人コレクションの公開までである。

日本博物館列島と呼んでもよいような現状の中で、自然史博物館はどうであろうか。自然史学は明治の初め、博物学と名づけられ、奇しくも博物館とよく似た名前をもっていった。「もの」を対象とする点で強い共通性がある。



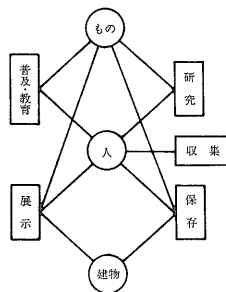
第1図 教育博物館の景(日本名所図絵 巻3 1889より)

り、違和感はない。むしろ、“博物学”=自然史学は博物館に深くかかわる分野である、といえよう。

自然史、とくに地学に関係の深い博物館を中心として、博物館の現状、問題点、これからのあり方などを探ってみたい。

2. 博物館の基本と機能

博物館の基本と機能についてはすでに何度か述べてきた(糸魚川, 1979, 1982など)。また、多くの人によって、さまざまな議論がなされている(たとえば、新井, 1979)。その概要は第2図のようにまとめられる。手短かに説明すると、「人」がいて、ある「もの」に興味をもち、「収集」を始める。それを整理して「保存」し、調べる(「研究」)。保存の場として、また、公開のために「建物」をつくる。そこでは、「展示」が行われる。



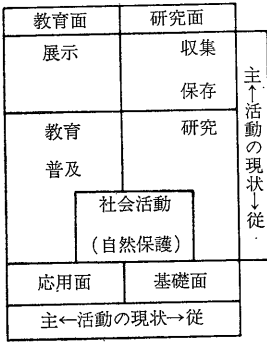
第2図 博物館の基本と機能

1) 名古屋大学理学部地球科学教室：〒464-01 名古屋市千種区不老町

キーワード：地学，自然史，博物館

ものについて、さらに広く・深く理解してもらうために、「普及・教育」の行事が行われる。このようにして博物館は成立し、機能するようになる。そして、博物館活動として継続して行われることになる。

さらに、博物館の機能を整理してみると、大きく2つの側面をもつといえる(第3図)。基礎となる研究面とその応用である教育面である。研究面は収集・保存・研究



第3図 博物館機能の2つの側面

などで、この面から発展して、教育面(展示・教育・普及など)が盛んになってゆく。博物館は基本的に研究・教育に関わっていて、大学などの学校教育機関や、研究所などと共通のものといえる。ただ、現状では、図にも示したように、活動の中心がかたよっていて、バランスがとれていないことが多い、といえよう。

3. 日本の自然史系博物館

それでは、日本における自然史系博物館の実体はどうであろうか。まず、数であるが、基礎データとして、「博物館・情報検索事典」(丹青総合研究所, 1986)の中の博物館リストを使用する。博物館の総数は4,057となっているが、動・植物園、水族館を除くと、3,673館となる。それを、都道府県別に一つ一つチェックし、自然史系か、また、その中に地学分野を含むかどうかを調べ、数をあたる。地方ごとに整理すると、次のようになる。

	数	自然史系の数	%	地学系の数	%
全国	4,057	382	9.4	124	3.1
(動物園などを含む)					
全国	3,673	382	10.4	124	3.4
北海道	322	49	15.2	12	3.7
東北	337	38	11.3	15	4.5
関東	539	66	12.3	23	4.3
東京	270	13	4.8	3	1.1
中部	902	99	11.0	36	4.0
近畿	463	33	7.1	6	1.3
中国	320	17	5.3	9	2.8
四国	155	20	12.9	7	4.5
九州	365	47	12.9	13	3.6
(動物園などを含まない)					

まず、自然史博物館について見ると、数では全体の約10%前後を占めている。地方別では、北と南で率が高い。美しい自然があって、対象となるのであろう。一般に東京以西、中国へかけて低くなるのに、中部で高いのは、やはり変化に富む自然によるものであろうか。東京・近畿は都市型で、逆に美術館などが多いことも原因していると思われる。

県別に見れば、多い方では沖縄(25.6%),高知(21.9%),秋田(19.1%)がベストスリーで、群馬、北海道、熊本が続く。少ない方は島根、広島、大阪、福岡、東京の順で、いずれも5%を割る。

自然史系の中で、地学分野を含むものは50%以下で、20~30%が普通である。博物館全体の中では5%以下、東京、近畿では2%以下で、きわめて少ない。詳細が不明な面があるので、もう少し多いかもしれないが、数の点で見ると、人文系、美術館に比べて、自然史系の博物館は少なく、地学分野を含むものはさらに少ない。

少し古いデータだが、世界の自然史系博物館の状況を調べたことがある(糸魚川, 1982)。全体的に見ると、20%以上の国が多く、東ドイツのように、50%に達する国もあった。日本の自然史系博物館はまだ不十分な発達過程にあるといえよう。

自然史系博物館といっても、そのあり方はさまざまである。大きく6つに区分され、次のような割合になる。

総数	自然史	総合館	合併館 (他分野と)	大学 センター	ビクター センター	観光
382	144	58	79	14	60	27
(%)	37.6	15.2	20.7	3.7	15.7	7.1

主体となるのは左よりの3つのタイプである。大学博物館の少ないのが特徴的である。

設立年を見ると、戦前のものはきわめて少なく、4%以下(14館)に過ぎない。1970年以降が多くなっている。

地学分野の館では、数は多くはないが単独での館がある。化石、鉱物、火山、鉱山などを主体としたもので、小さい館が多いが、個性的なものが見られる。個人コレクションのものも含まれる。総合館(県立・市立)には地学分野が含まれることが多い。自然史博物館にもその多くに、とくに大規模な館には地学分野があり、活動的な館が多い。大学博物館は数が少ない上に、人的・経済的制約の多い所が見られ、外国に比べて見劣りがする。歴史のある大学(たとえば、東北大、京大など)にそれがないのは淋しい限りである。

このように、地学を含む自然史系博物館は実に多様である。外国に比べて、また、他分野と比較して不十分ではあるが、館によっては活発に活動し、十分な効果を挙げている所もある。一方、つくられたままで進歩のない

館、活動的でない館もある。博物館における地学分野はさらにレベルアップを考えなければならない。

4. 博物館の現状

博物館を考える上で重要なことについて、いくつか検討して見る。まず、基本では「人」のことがある。「人」の中では学芸員が重要な地位を占める。外国のキュレーターと比べて、また、図書館における司書と比べて、学芸員は十分に評価され、処遇されていないことが多い。第2図に示した博物館の機能をつかさどるのは学芸員であり、学芸員こそ博物館の中心であるといえる。

学芸員についての認識が足りないことは、その数を見てもわかる。一例として、日本地質学会の名簿(1988)から、博物館職員を選んで見た。正会員4,784名中84名、1.8%である。その内訳は国立16、県立31、市立21、町立7、大学5、その他4である。日本古生物学会の名簿(1989)では、会員728名中41名、5.6%でやや高い。いずれにしても、学芸員をおかない館があり、先に述べた博物館数と比べて、いかに少ないかがわかる。

位置づけの低いことは、学芸員の職務の内容にもかかわっている。自ら雑芸員と呼ぶ人があるように、多様な仕事をこなさざるをえない立場にある。本来、博物館の業務は複雑なので、止むを得ない面もあるが、しわよせが研究の面に及ぶことが多く、問題である。

「もの」—資料—についても多くの問題がある。第1に、博物館の基礎であるにもかかわらず、「もの」を得意しないで博物館がつけられることがある。そして、それがそのまま過ぎれば、何の蓄積もないことになる。

自然史、とくに地学分野では、限られた国土の中で、多くの制約を受けている。質と量の問題、自然保護とのからみ、資料の偏在などである。最近では、資料を外国に求めること(購入・採集など)が多くなったが、ここにも問題がある。価格の上昇、保護の問題などである。いずれにせよ、かつての欧米諸国がやったような掠奪だけは避けたい。札束にものをいわせるのも、一種の掠奪ではないだろうか。

次に、博物館における研究を考えて見ると、博物館において特別なことがあるのではないが、似合った、特色を出す研究、というのが考えられる。1つは「もの」を対象とする研究であり、第2には地域に根づいた研究である。地学分野は本来その面をもっているのでやりやすい。そして、自らの地域から日本・世界の規模へ広げればよいのである。

このような研究は直接展示に反映できる。たとえば、写真1は瑞浪市化石博物館の、貝類の展示であるが、豊

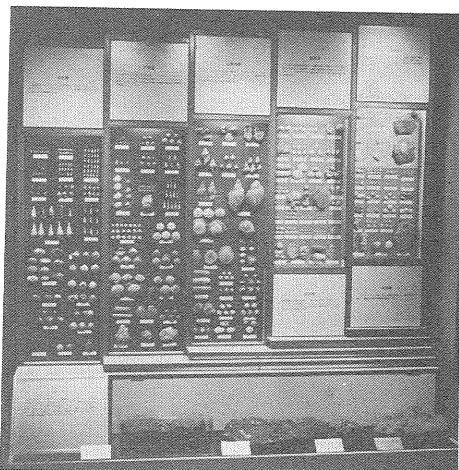


写真1 瑞浪市化石博物館の貝の展示

富な材料があり、かつ、それがよく研究されているので、充実したものになっている。開館時の展示はその後の収集・研究の成果をとり入れて5年後につくりかえられ、よりわかりやすい、内容のあるものになった。

展示は一度つくっておしまい、の時代が過ぎ、5~10年の期間での展示替えが行われるようになってきた。内容が新しく変るということだけでなく、新しい方法・技術が導入されている。音・映像などがとり入れられ、これまでの、もの資料・パネル・ジオラマなどによる展示と、どう調和させてゆくか、努力が続けられている。

5. これからどうするか

これまで見て来たように、日本の博物館は地学分野、自然史ということに限らず、よい面・悪い面を含めて、極めて多様である。同時に、将来を考えた時、多くの問題を含んでいる。特に、これだけ博物館が多くなり、かつ、似たような、もっと面白い施設がふえてくると、博物館へ来る、「人びと」の気持がどう変わるか、大きな問題がある。来館者が多いだけがよし悪しの基準ではないが、人の来ない博物館は淋しい。21世紀は博物館のサバイバル時代となりそうである。

それではどうしたらよいか。いろいろな視点から見てみたい。まず、「人」であるが、意欲ある、すぐれた人をどんどん博物館へ送りこみたい。大学や研究機関、博物館相互の人的交流も必要である。学芸員の地位を確かにするためには、研究・教育の両面でのグレードアップが必要である。とくに、基礎としての研究をぜひ重視して欲しい。さらに、運営に関して、事務職の人にまかせきるのでなく、積極的に発言したい。また、学芸員の仕事の内容を、同僚・上司に理解してもらうことも必要で

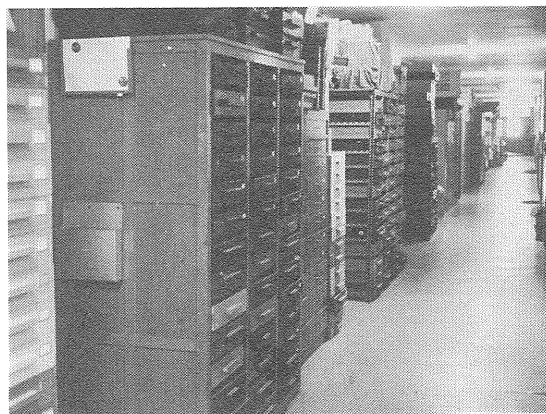


写真2 廊下に積まれた標本(名古屋大学)

ある。学芸員は博物館の柱である。辛くて困難なことが多いが、乗り切って欲しいものである。

「もの」についての問題は、いかに多くのものを収集し、保存するかということにつきる。集めるには、いろいろなやり方がある。採集する、買う、寄贈を受ける、つくる(レプリカ)などである。これらが問題を含んでいることはすでに述べた。考えられることの一つに、流通の問題がある。多くの標本資料が死蔵されたままとなっていることがある。大学などは、その多くが収蔵庫をもたず、廊下に積み上げられ(写真2)、ほこりをかぶり、果ては棄てられることさえある。これらの標本を博物館へ、と考えるのは無理なことだろうか。個人のコレクションはしばしば当人の手を離れると、散逸したり、管理が不完全になったりする。最終的には博物館へ入るのが一番よい。寄贈するか、売却するか、それはその時の条件によるだろう。

レプリカは「本物」が手に入らない場合の代用として十分に効果をもっている(写真3)。日本の製作技術は本物と見まがうほどのものをつくり上げている。ただ、同じものがあちこちにあるという問題が出てくるが、博物館の間で調整することは可能であろう。要するに、「もの」についてはできるだけ掘り起し、広く行きわたらせることにつきると思われる。

博物館はこれから先、自然史研究のとりでとなるだろう。日本における学問のすう勢はこの分野を軽視する方向に向うように見える。自然環境の問題を考える上で重要な分野であるが、現実はきびしい。その対応のためにも、博物館における研究はさらに深く・広くすすめるまい。

このことに関連して、自然保護の問題がある。動植物

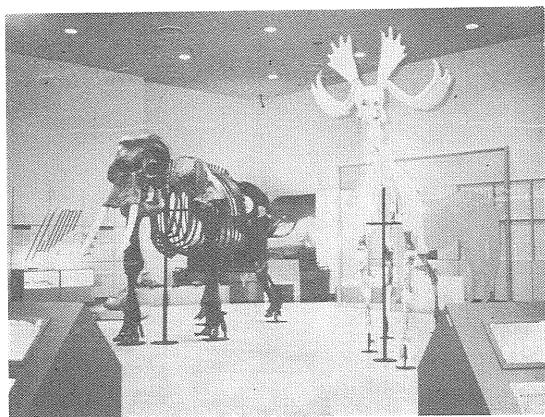


写真3 豊橋市自然史博物館の展示

のみならず、化石・鉱物を含めた地質現象も対象となる。乱獲の他、建設工事による破壊が大きい。早急な対応が望まれ、それは地域の博物館の担う仕事である。

地学系の自然史博物館をつくるとしたら、これから、どんなものが考えられるだろうか。領域として、海洋、第四紀、環境、地震、応用地質などが考えられる。地域と関連させて考えたらより効果的であろうと思われる。

館の種類としては、大学博物館が望まれる。大学には十分な材料(もの)とスタッフ(人)が揃っている。開かれた大学のシンボルとして、ぜひ博物館をつくって欲しい。

最後に、21世紀へ向けて、社会は急速に動いている。博物館もそれに対応して活動しなければならない。考えられる事象として、両極化がある。いくつかの例を挙げれば、多様化—様化、国際性—地域性、動的一静的、遊び—学びなどである。十分に説明するスペースがないが、一言でいえば、変化に富んだ世界になるということである。それぞれの博物館が十分な対応をして、活発に活動し、多くの人びとを博物館に迎えて欲しいと思う。

引用文献

- 新井 重三(1979): 博物館の機能と活動. 博物館学総論(博物館学講座第1巻), p.63-120. 雄山閣出版.
- 糸魚川淳二(1979): 博物館だより. 220p. 共立出版.
- (1982): 博物館を考える. 194p. 共立出版.
- 丹青総合研究所(編)(1986): 博物館. 情報検索事典. 544p. 丹青社.

ITOIGAWA Junji (1990): Some problems of geology museums in Japan

<受付: 1990年5月1日>